

育児態度と子どもの性格との関係

研究第8部 牛島義友

前論文で新しい親の育児態度の検査を作製したが、それと子どもの性質との関係は不安の軸以外はほとんど関係がみられず予想に反した結果となった。親の育児態度と子どもの性格をみる場合にはそれぞれの態度や性格を客観的に測定する方法に問題がある。シヤースなどは親の態度をみる場合にもインタビューや客観的な行動評価などを併用しているし、子どもの性格評価にあたっては誰が評価するかという評定者の問題もあるし、客観的な行動から評価する必要も考えられてくる。即ち親ならびに幼児の態度評価そのものに問題が多いために両者の関係が低くなるということも考えられる。しかし従来の研究の中でもセファールとペーレーの研究は両者間に高い相関を示している。故に彼らが用いたものとしてできるだけ類似した方法と条件で研究することとした。

セファール、ペーレーの研究はカリフォルニア大学におけるバークレイ発育研究という膨大な研究の中で行なわれている。即ちその附属病院で生まれた61名の子どもの18年間以上にわたる追跡研究であり、その際にいろいろな時点において母親の行動や子どもの性質が検査されている。母の行動は乳児の場合は行動観察、その後はインタビューによって資料を集め、それをPARI尺度で評価し直したものである。子どもの性質は発達研究の検査の場合の観察からなされている。子どもの年齢でいうと10～36か月、27～96か月、9才～12才、及び青年期の4つの時点において行なわれており子どもの観察された性質も多少相違するが、ここでは27から96か月の時点における母の育児態度と子どもの四つの性質、即ち交友性、協力性、注意力、理解力との相関の部分だけを取り上げて問題とする。この場合には後で述べるようにかなり高い相関値を示すものがある。

我々の研究では、まず母親の態度としてPARIの第四形式に戻ることにした。それは23項目で115問からなっているが彼らの研究において特に子どもの性格との相関が高く出た14の項目を取り上げた。

それは 1. autonomy 2. Ignoring 3. Punitiveness 4. Perceives Child as Burden 5. Strictness 6. Intrusiveness 7. Concern about Health 8. Expression of Affection 9. Equalitarianism 10. Positive

Evaluation 11. Rejection of Homemaking 12. Suppression of Aggression 13. Dominance 14. Dependency である。

各項目に5問ずつ問題があるが、できるだけ原著に近い形の問題にした。日本の生活を考慮した質問よりも翻訳調の問題である。なおこの点親たちからは問題が非常につけにくいという批評もあったが、ここではできるだけアメリカの研究と同一にしようと努力した。各小問はA大いに賛成、aやや賛成、dやや不賛成、D大いに不賛成の四段階になっている。母親の行動は母親自身の自己評価であり、この点セファールらのものとは相違する。

この子どもの態度は知能テストを受けている時の子どもの態度を評定した。そのためには別紙のような評定尺度を用意して5段階に評定した。これもセファール・ペーレーの調査用紙に近づけて行なったものである。

調査のやり方としては愛育研究所の教養相談に來た3才から6才までの幼児とその母親について行なった。テストを受けている間、母親に検査用紙(PARI-X)を渡して記入してもらい一方子どもの態度はテストを行なったテストターに検査後評定してもらった。人数は男児98名、女児105名計203名で3才から6才までそれぞれ50名を目標として集めた。この調査は昭和44年6月中旬から9月中旬に行なった。

両者の相関は母親の14の態度の点数と交友性、協力性、注意力、理解力との相関を電算機で出した。なお3.4才と5.6才の二つの年齢並びに男児、女児別に相関を出した。この相関値とセファールらの研究における相関値とを比較することとした。全部の表を示すのは大変であるのでその一例として5.6才男児の結果を示す。この中の数字は一番上にセファールらの相関係数を示しそのつぎにわれわれの得た相関係数、その次にはその差を示した。交友性との相関はセファールらの研究で.3(十と一を含めて)以上のものが6個あるのに対しわれわれの方で.3以上になったものは一つもなくせいぜい.28と出たのが最も高かった。協力性ではセファールらの研究では.3以上の相関が出たのが9個に対しわれわれのものには一つもなく.26のものが最高であった。注意力ではセファールらの研究では7個が.3以上であるのに対しわれわれの

子どもの名前

子供の作業態度

検査中の子供の態度を、次の項目により、評価して下さい。質問に対しては、程度に従って、いづれかの番号に○印をつけて下さい。

1. 交友性

- イ 検査に臨んだ最初の態度： 否 定 的 1 2 3 4 5 交友的
(人みしり)
- ロ 検査経過中の態度： 否 定 的 1 2 3 4 5 交友的
- ハ 作業中の態度(熱心さ)： 無 欲 1 2 3 4 5 熱 心

2. 協力性

- イ 協力する態度： う つ り や す い 1 2 3 4 5 一定した協力態度
- ロ 検査者への注意力： 注 意 散 漫 1 2 3 4 5 注意十分
- ハ 検査者の指示に従うか： 自 分 か っ て に や る 1 2 3 4 5 指示通りやる

3. 注意力

- イ 外界からの妨害により： 気 が 散 る 1 2 3 4 5 集 中
- ロ 持続性： 飽 き っ ぱ い 1 2 3 4 5 持続性大
- ハ 連 想： 飛 躍 的 1 2 3 4 5 制約的(的に当たっている)

4. 理解力

- イ 作業ののみこみ： 遅 い 1 2 3 4 5 速 い
- ロ 言語による応答： 不 明 瞭 1 2 3 4 5 明 瞭
- ハ 実行の方法： 手 当 り し だ い 1 2 3 4 5 系統的(組織的)

方には、.3以上は一つもなく、.26が最高であった。理解力はセファーらの研究は8個に対しわれわれの方はやはりゼロであり、.29が最高であった。

それ以外の年齢集団についても同様で、.3以上の相関があったものは次ぎのように全体で7個にすぎない。

- 男児 3.4才 9 対等と交友性
5.6才 なし
- 女児 3.4才 5 厳格性と協力性
5 厳格性と注意力
8 愛情表現と友好性
8 愛情表現と協力性
5.6才 8 愛情表現と協力性
8 愛情表現と理解力

それ以外のものは、.2台がせいぜいであって0台のものも沢山現われている。即ちセファーらの研究とわれわれの場合では相関値にかなりの違いがあって一般に低い。

われわれの方法とセファーらの方法とは特に母親の態度評価の仕方と相違があるけれども彼らがいう程の高い

関係を期待するのは無理なのではなかろうか。

討 論

親の育児態度と子どもの性格との関係についてはラトケの1946年の研究以来特に注目されるようになった。彼はミネソタ大学の児童研究所の43名の幼児について研究を行ない、まず親に対して127問の質問紙で育児態度を調べ、子どもについては質問とプロジェクトメソッド(人形遊び)によって調べてその行動を20の項目について評定している。家庭の雰囲気は民主的か専制的かによって子どもの行動に有意差を示すものを調べている。それによると20項目の中で、危険率5%以下のものは2個、10%から5%の間のものが5個であった。その他育児態度が自由か拘束的かということについては危険率5%以下のものは2個、処罰が穏やかか厳格かの点と子どもの性格との間では5%以下3個である。彼は普通有意差があると認められる5%以下の数が少ないので危険率20%以下のものまで取り上げて論じている。彼の場合は今まで親子の間の関係が不明であったことに対して積極的な関係

牛島：育児態度と子どもの性格との関係

〔5・6才男児〕(53名)

親の態度と子供の性質との相関

上段 PARI 中段 PARI-X 下段 () 内は両者の差

	PARI	PARI 第四形式	友 交 性 Friendliness	協 力 性 Cooperativeness	注 意 力 Attentiveness	理 解 力 Facility
1	Autonomy	生理面での早期自立	-.08 -.1866 (+.1066)	-.14 .0238 (-.1638)	.25 .1301 (+.1199)	.21 -.1207 (+.3307)
2	Ignoring	意志疎通の忌避	-.58 -.0756 (-.0756)	-.60 .0479 (-.6479)	-.44 .0109 (-.4509)	-.54 .1035 (-.6435)
3	Punitiveness	意志の挫折	-.14 -.0667 (-.0733)	-.34 -.0296 (-.3104)	-.42 .0255 (-.4455)	-.58 .0423 (-.5377)
4	Perceive Child as Burden	子供を重荷と感じる	-.49 .1641 (-.6541)	-.47 .2028 (-.6728)	-.61 .2687 (-.8787)	-.69 .1663 (-.8563)
5	Strictness	厳格性	-.18 -.0469 (-.1331)	-.09 .0069 (-.0969)	-.26 .0446 (-.3046)	-.33 .1314 (-.4614)
6	Intrusiveness	出しゃばり	.13 -.1414 (+.2714)	.34 -.1478 (+.4878)	-.04 -.0997 (+.0597)	-.21 -.1851 (-.0249)
7	Concern about Health	赤ん坊傷害の恐怖	.28 -.0883 (+.3683)	.35 .0094 (+.3406)	.16 .0810 (+.0790)	.23 -.1593 (+.3893)
8	Expression of Affection	愛情表現	.32 .2200 (+.1000)	.46 .2032 (+.2568)	.39 .1235 (+.2665)	.40 .1546 (+.2454)
9	Equalitarianism	対 等	.42 .0418 (+.3789)	.43 .1418 (+.2832)	.40 .0893 (+.3107)	.56 .0540 (+.5060)
10	Positive Evaluation	言語表現の奨励	.33 .2427 (+.0873)	.45 .2695 (+.1805)	.48 .0880 (+.3920)	.52 .2928 (+.2272)
11	Rejection of Homemaking	家政的役割の拒否	-.57 .1207 (-.6907)	-.42 -.0737 (-.3463)	-.41 -.0705 (-.3395)	-.53 .0428 (-.4872)
12	Suppression of Aggression	攻撃性の抑圧	.14 .1387 (+.0013)	.27 .0831 (+.1869)	.08 .1460 (-.0660)	-.09 -.0115 (-.0785)
13	Dominance	母親の優位	-.06 -.1053 (+.0453)	.10 -.0550 (+.1550)	-.16 -.0089 (-.1511)	-.24 -.0319 (-.2081)
14	Dependency	母親の依存	-.26 .2829 (-.5429)	-.05 .2019 (-.2519)	.05 .1808 (-.1308)	-.12 .2075 (-.3275)

があるということを証明した点に画期的な意味をもった研究であった。従ってその後も多くの研究者によってこの問題が追究された。しかし彼の研究の場合に確実な有意差を示す項目がむしろ少数であったことを忘れてはな

るまい。シアースは親と子の態度調査をするのに単なる質問紙法では不十分としてインタビューを主にして397名の母親と組織的な面接を行ないその結果を118の尺度で評定し、子どもの行動を食事、排泄、依存性、性、

攻撃性などに分けて、前者との関係を調べた。彼の研究は親の育児態度が子どもの性格形成に積極的に関係があるということを証明した文献として高く評価されている。この研究の中には沢山の統計と数字が示されているが両者の関係を相関係数で示したものは余りない。子どもの食事行動に問題をもったものと親の訓練との関係についてみてみると次のような相関値となっている。

	相関値
母乳との関係	.01
規則授乳	.01
離乳開始時期	-.06
離乳完成期	-.02
離乳の厳しさ	-.01
離乳についての子どもの情緒的反発	-.02
排泄訓練の厳しさ	.12
親への攻撃の許容	-.12
依存性に対する母の反応	.09
体罰の使用程度	.14
子どもに対する母の愛情の程度	-.14

次に子どもの依存性と母の育児態度に関したものをみると、

	相関値
訓練法としてかまってやらない	.19
親に攻撃した時の処罰の程度	.15
拒否の数	.12

などである。この中には無関係とシアース自身がいつている数字も沢山あり、.1台以上のものに有意差を認めているが、しかしその程度は.2以下である。ヤーロー(Yarrow)らはシアースの取り上げた問題を専ら相関係数によって再検討している。親の育児態度と子どもの性質として独立、依存、注意を惹く、接触要求、不安、両親への攻撃性、兄弟げんかとの相関値だけを拾ってみても182の相関の中で±.3以上の相関値を示したものは5個だけでその他それより小さい。10以下の無関係とみなすべきものの数は92個で約半数に達していた。従って彼は親の育児態度と子どもの性質態度とは関係がないと結論している。シアースは関係が深いといい、同じ類似の方法でヤーローたちは関係がないと結論しているが、その関係の相関値をみるとほとんど同じような程度であり、相関係数が.30以上のものはごく少数であって関係があるといっても相関係数で.20前後の程度であり.10以下のものも半数近くみられている。

これに対して本研究で取りあげたセファ・ペーレーの研究は非常に高い相関係数を示している。しかしこれらはわれわれの追試研究では低い値となり前述のように

.3以上の相関係数は224個の相関値の中で7個に過ぎなかった。この程度はヤーローらの結果とむしろ非常に近い程度といえよう。また前論文においてわれわれが新しく作った親子関係調査票の場合に不安の軸のみが.306で支配と愛情の軸では相関が0台であったということもまた特に例外的なものとはみる必要がない。むしろセファ・ペーレーの研究の方が例外的である。あるいはわが国において児玉省氏が育児態度と子どもの性格についての組織的な研究を行っており、親の態度を厳格、過保護、混合、民主、拒否に分け、YGテストの12の性質との関係をみているが5%の有意差があるものが5個ほど見出されるけれども「われわれが使用した矢田部ギルフォード性格検査では、しつけ類型の生んだ性格類型の間に著しい性格差を見出すことができない。しかし拒否型と民主型についてはある程度関係がある」と述べている。

これらの研究から考えて、親の育児態度と子どもの性格との関係については高い相関を期待することは誤ちであってむしろ.3以下の関係しか得られないものというのが穏当な結論ではなかろうか。

しかしこのことは両者の間に関係がないというのではなく、子どもの性格形成の1ファクターとして親の育児態度が考慮されてよいことは否定されない、だがその程度は非常に強い因子となるものではない。

この点についてしかし人々はそんな筈はない。なにか研究法に欠陥があるのではないかの疑問をもつであろう。しかし方法に関しては単なる質問紙法以外に面接を重視したり行動観察やプロジェクトブテクニクを用いたものも数多くあり、臨床的立場からの少数の事例に基づく推測よりははるかに信頼のおける方法で検討されている。従来諸研究者の結論の違いは関係の程度の相違よりもむしろ解釈の違いである。統計的有意差だけに頼って有意差の項目がいくつかあれば両者の間に深い関係があると論じたり、あるいは相関係数の程度をみて、.3以下に過ぎないことから深い関係はないと結論する解釈の相違によるものが多いようである。

(本研究は中川とし子の協力によって行われた。)

〔文 献〕

Earl S. Schaffer & Nancy Bayley, Maternal behavior, Child behavior and their intercorrelation from infancy through adolescence.

(Monograph of the Society for Research in Child Development No. 87 1963)

Radke M.J., The relation of parental authority to

牛島：育児態度と子どもの性格との関係

children's behavior and attitudes..

(The Univ. of Minnesota Press 1946)

R. R. Sears, E. E. Maccoby and H. Levin, Pattern
of Child Rearing. 1957

M. R. Yarrow, J. Campbell and R. V. Burton,
Child Rearing-An Inquiry into Research and
Methods. 1968

児玉省、子どものしつけと性格、保育講座 6 1969